

---

## 近・現代アメリカ英語における way 構文の発達について\*

石崎 保明

### Abstract

This paper deals with the historical development of the *way*-construction in the United States from the Late Modern English period onwards, from the perspective of historical construction grammar. Based on *Early English Books Online (EEBO)*, Ishizaki (2013) showed that the construction made a schematic extension from the prototypical constructional meaning of “building a road to clear or avoid some obstacle” to the meaning of “movement by force to clear or avoid some obstacle” by the end of the seventeenth century. This paper develops this observation and claims that further schematic extensions were made in American English from the nineteenth century onwards. Specifically, based on the investigation by means of *The Corpus of Historical American English (COHA)*, the constructional meaning of the *way*-construction extended from the constructional meaning of “movement by force to clear or avoid some obstacle” to the more schematic constructional meaning of “a movement to clear or avoid some obstacle.” It is also argued that, for at least some native speakers of American English, the construction has a further schematic constructional meaning of “a peculiar type of movement,” which does not accompany a kind of obstacle or difficulty.

---

\* 本稿は、2013年8月31日開催の第5回後期近代英語における国際会議（5th International Conference on Late Modern English）（於：ベルガモ大学、イタリア）において口頭発表した内容（題目：“A Historical Constructional Approach to the *Way*-Construction”）の内容を一部含んでいる。なお、本稿は科学研究費補助金（基盤研究（C）：課題番号24520557）による研究成果の一部である。

## 1. はじめに

現代英語 (present-day English) には, (1) に例示されるような way 構文 (way-construction) とよばれる比較的生産性の高い表現があり, 構造的には, (2) のように表示することができる。

- (1) a. Sally made her way into the ballroom. (Goldberg (1995: 204))  
b. They forced their way into the shop.  
c. John elbowed his way through the crowd.  
d. He laughed his way into the room. (Gisborne and Patten (2011: 94))  
(2) [SUBJ<sub>i</sub> [V POSS<sub>i</sub> way] (DIR(ectional))]<sup>1)</sup> (Traugott and Trousdale (2013: 79))

よく知られるように, この way 構文には, 統語と意味の両面において, いくつかの興味深い特徴がある。統語的な特徴として, この構文には (2) の V の位置に他動詞 (e.g. *make, force, elbow*) も自動詞 (e.g. *laugh*) も生起が可能であることや, 方向を表す副詞句が義務的であること, などを挙げることができる。意味的な特徴としては, (3) に示されるように, 主語の指示対象が方向を表す副詞句によって示された経路を移動することが含意されることがや, その移動にはしばしば, ある種の障害 (物) (obstacle) の存在や困難さ (difficulty) を伴うこと, などを挙げることができる。

- (3) a. \* Frank dug his way out of prison, but he hasn't gone yet.  
b. \* Frank found his way to New York, but he hasn't gone yet.  
(Goldberg (1995: 201))

---

1) V(erb) と DIR(ectional) は, それぞれ, 非状態動詞 (non-stative verb) と方向を表す副詞句を表している。後者について, Goldberg (1995: 199) では OBL(ique) となっているが, 一般に oblique という用語には移動を伴わない位置を表す句 (locative phrases) も含まれることから, Traugott and Trousdale (2013: 76) では (2) の表記が採用されている。

このような統語的・意味的特異性のため、way 構文は、過去約 20 年以上にわたり、さまざまな理論的枠組みで活発な議論がなされてきた。近年では、言語を「慣習的な形式と意味のペア (conventional form-meaning pairings)」と仮定する構文文法理論 (construction grammar theory, 以下 CG) が、この構文の特異な振る舞いを説明する有望な理論的枠組みの 1 つとして、特に注目を浴びている。しかしながら、way 構文に対する CG の観点からの研究に目を向けてみると、そのほとんどが、他の言語理論の場合と同様、この構文の現代英語における振る舞いを扱ったものであり、その歴史的発達の CG からの考察が十分になされているとはいえない。

本稿の目的は、The Corpus of Historical American English (COHA) を用いて、1810 年から 2009 年までのアメリカ英語における way 構文の通時的な発達過程を明らかにすること、および、その変化の過程を CG の観点から考察することである。具体的には、初期近代イギリス英語における way 構文の発達を調査した Ishizaki (2013) による (4) の観察をさらに発展させ、後期近代以降のアメリカ英語では、(4) における [スキーマ (2)] から、(5) に示されるように、[スキーマ (3)]、さらには、すべてではないが母語話者の中には [スキーマ (4)] への拡張がみられることを指摘する。

- (4) Way 構文における初期近代イギリス英語にみられるスキーマの拡張  
(Ishizaki (2013))

[スキーマ (1)] (Least schematic) [ROAD BUILDING TO CLEAR/AVOID  
SOME OBSTACLE] >>

[スキーマ (2)] [MOVEMENT BY FORCE TO CLEAR/AVOID SOME  
OBSTACLE]

- (5) Way 構文における後期近代以降のアメリカ英語にみられるスキーマの拡張  
[スキーマ (3)] [MOVEMENT TO CLEAR/AVOID SOME OBSTACLE] >>  
[スキーマ (4)] (Most schematic) [PECULIAR TYPE OF MOVEMENT]

本稿の構成は以下のとおりである。まず、次の2節では、本稿で扱われる理論的枠組みであるCGにおいて共有されている用法基盤モデル(usage-based model, 以下, UBM)を紹介し、way構文の歴史的発達に関する先行研究であるIsrael (1996)について、UBMの観点からその問題点を指摘するとともに、その問題点を解決するための試みであるIshizaki (2013)を概観する。3節では、way構文の近代英語期以降の発達について、地域差なども考慮に入れながら観察する。4節では近・現代アメリカ英語におけるway構文に現れる動詞と前置詞の分布の歴史的変遷をCGの観点から考察する。5節は結語となる。

## 2. 用法基盤モデル(UBM)と通時的言語変化の研究

### 2.1. 理論的想定

認知言語学とその流れを汲むCGは、実際の発話の場における「ことばの使用」が話し手や聞き手の認知能力に作用し、そのような認知能力が言語能力に影響を与える、という言語観に基づいている。その際、言語表現(CGでは“構文(construction)”)とよび、単語だけでなく、形態素や複数の語が組み合わさった事例も含まれる)は、単なる文字列や音声による刺激だけではなく、発話が行われる際の周囲の状況や話し手の「表情」や「身振り」といった文脈的情報とともに伝達される、と仮定されている。このような、使用の実態から言語現象を捉える分析の手法は、一般に「用法基盤モデル(UBM)」とよばれる。UBMでは、言語表現の使用頻度(frequency)が、当該の言語表現の話者および話者が属する言語環境における“定着度(degree of entrenchment)”を測る際に重要な役割を果たしている。ある言語表現の使用頻度を算出する際には、一般にトークン(token)とタイプ(type)という2種類の指標が用いられ、言語表現の発達や変化において、両者はそれぞれ(6a, b)のような、質的に異なる形で関与するものと想定される。

- (6) a. A token frequency of a construction determines the degree of entrenchment of individual substance word form.  
b. A type frequency of a construction determines the degree of entrenchment of a schema.  
(Boas (2013: 247))

ある言語表現のトークン頻度がきわめて高い場合、その言語表現がある特定の認知のパタン、すなわち「構文スキーマ (construction schema)」として脳内に保存され、さらに上位の「抽象的な構文スキーマ」を形成することなく、直接的に処理される。そして、そのような表現が一旦脳内に定着すると、他の類似した構造をもつ要素とネットワークを構成しにくくなるため、さらなる変化が起こりにくくなる。このような状況は、一般に「保守化効果 (the Conserving Effect)」とよばれる (Bybee (2006))。

「タイプ頻度」とは、ある言語表現が、どのくらい多くの種類のものと共起したのか、を示す頻度であり、例えば過去形を表す英語の walked などの -(e)d 形は taught などの -t 形よりもタイプ頻度が高いといえる。ある言語表現のタイプ頻度が高くなるということは、その言語表現が抽象度の高いスキーマを獲得している、と考えることができる。タイプ頻度の高い言語表現は、私たちが日常生活において、多様な言語環境にさらされていると考えることができ、そのような経験が繰り返されることにより、さらに高い抽象性をもったスキーマとして脳内に蓄積され、話し手は創意工夫や類推などにより、さらにさまざまな種類の要素と結び付けてその表現を用いようとするようになる。(7) に示されるように、ある言語表現がどのくらいの種類の要素と共起可能かを示す尺度は「生産性 (productivity)」とよばれる。この生産性は、「文法化 (grammaticalization)」や「語彙化 (lexicalization)」の進行の度を測る指標としてしばしば用いられる<sup>2)</sup>。

---

2) Brinton and Traugott (2005) は、文法化と語彙化を、それぞれ (i), (ii) のように定義している。

(i) Grammaticalization is the change whereby in certain linguistic contexts speakers use parts of

- (7) Productivity is a matter of how available a pattern is for sanction of novel expression.  
(Langacker (2000: 26))

Figure 1 は、UBM に基づく通時的な構文変化のプロセスを表している。

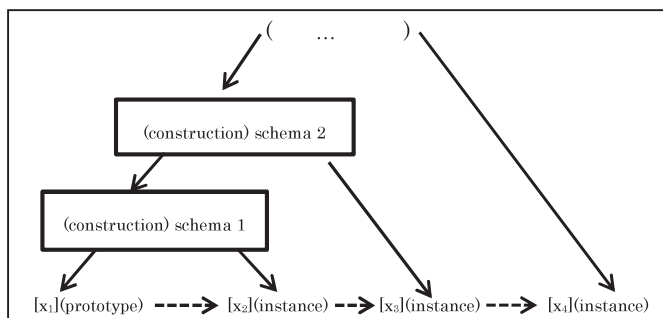


Figure 1 用法基盤モデルにおける通時的構文変化 (cf. Langacker (1987: 373), Ishizaki (2012: 253))

構文変化 (constructional change) は、ある具体的な意味内容を持つプロトタイプの表現からスキーマの意味が抽出されるプロセスである。その場合、主にタイプ頻度の増加に伴い、さらに抽象度の高いスキーマが抽出されていく場合 (文法化) もあれば、タイプ頻度が減少し、プロトタイプよりもさらに特殊化した意味内容をもつスキーマが抽出されていく場合 (語彙化) もあ

---

a construction with a grammatical function. Over time the resulting grammatical item may become more grammatical by acquiring more grammatical functions and expanding its host-classes.  
(Brinton and Traugott (2005: 99))

- (ii) Lexicalization is the change whereby in certain linguistic contexts speakers use a syntactic construction or word formation as a new contentful form with formal and semantic properties that are not completely derivable or predictable from the constituents of the construction or the word formation pattern. Over time there may be further loss of internal constituency and the item may become more lexical.  
(Ibid: 96)

る<sup>3)</sup>。通時的構文変化は、言語表現の使用とともにスキーマが時代を経て更新されていくプロセスであると考えることができる。

## 2.2. Way 構文の通時的発達に関する先行研究

### 2.2.1. Israel (1996)

Way 構文の通時的な発達については、Israel (1996) の研究がよく知られている。Israel の研究とその再検討の詳細については Traugott and Trousdale (2013: 2.7 節) に譲ることとし、ここでは、主に UBM の観点から Israel の研究の問題点を指摘する。Israel は、CD-ROM 版の Oxford English Dictionary (OED) から採取された資料に基づき、way 構文の発達は用法基盤 (usage-based) であると主張している。Israel によるこの主張は、本稿におけるそれと軌を一にするものである。しかしながら、彼のその主張に至るまでの分析手法には、2.1 節でみた UBM の考え方を厳密に捉えた場合、少なくとも 2 つの点で問題がある。第 1 に、もちろん、言語資料として OED を用いることそれ自体は有効な研究手法の 1 つであるものの、OED は文脈を捨象した単文の用例を集めたものであり、また CD-ROM 版の OED の調査からわかるのはタイプ頻度の分布のみである。つまり、OED の調査からわかるタイプ分布の通時的変化がどのようなトークン分布の通時的変化に支えられているのかを知ることができない。とりわけ OED では、例えば品詞転換や外来語など、特殊な使い方をする場合に積極的に採録される傾向があることから、タイプ頻度の高い事例が必ずしも高いトークン頻度に支えられているわけではない。

もう 1 つの問題として、Israel (1996) では、もっぱらこの構文に生起する動詞に焦点が当てられており、方向を表す前置詞句の意味機能や動詞との

---

3) 通時的構文変化としての語彙化には、さらに、きわめて高いトークン頻度による語彙化と、トークン頻度の減少による語彙化の 2 種類に分類することができる。その際、保守化効果は、前者において観察される。

結合関係、および使用される文脈を踏まえた、構文全体の通時的变化に対する考察が欠けている。4 節で述べるように、way 構文では、動詞の意味やセンテンスレベルからでは何ら障害(物)の存在や困難さを想起することができないような用例であっても、前置詞句との共起関係やその前後の文脈からそれらを想定することが可能なものが多い。よって、Israel が提案した、何ら障害性・困難性を含まない「移動に付随する活動 (incidental activity)」の用例(本稿ではおおむね「特異なタイプの移動 (PECULIAR TYPE OF MOVEMENT) に相当する」)は、現代アメリカ英語においてもそれほど頻繁に観察されるわけではない。

以上のことから、Israel の研究は、way 構文の通時的発達の過程を調査し、UBM が言語変化の説明理論として有効であることを示そうとした点において、および、その研究が CG の初期の段階でなされたという点において、大きな貢献を果たしているが、その後の UBM 研究の大きな進展もあり、現代における UBM の観点からすると、必ずしも十分なものとはいえない<sup>4)</sup>。

## 2.2.2. Ishizaki (2013)

前節でみた Israel (1996) における問題点を念頭に、Ishizaki (2013) では、Early English Books Online (EEBO) に基づき、17 世紀末に使われた way 構文に生起する動詞と前置詞、およびその結合関係に関する調査が行われている。EEBO は、1473 年から 1701 年の間に英国やその当時英国の植民地であった場所で出版されたあらゆるジャンルの英語で書かれた資料 125,000 点以上を収容したデータベースである。このデータベースを用いて、Ishizaki (2013) は、調査する年代を way 構文としては初期の発達と考えられる 1670 年から

---

4) 本稿で挙げた UBM における Israel (1996) の問題点に対して、Traugott and Trousdale (2013) では、Middle English Dictionary その他電子コーパスを援用して、使用される文脈にも配慮しながら議論が進められているが、以下で議論するような、トークン頻度とタイプ頻度の関係に基づく way 構文の共時的・通時的考察はなされていない。



1699 年の 30 年間に絞り、用例も [VERB + *their way*] という検索式で得られたものからさらに方向を表す副詞句 (DIRECTIONAL PHRASE) を伴う用例のみを採取した。Table 2 は、way 構文に生起する動詞と前置詞の 10 年ごとの分布を調査した結果である。なお、参考のため、Table 1 には CD-ROM 版の OED からの採取される同時期の way 構文の用例数も併せて表示されており、Ishizaki (2013) の調査は、way 構文の用例としてはきわめて限定的なものではあるが、それでも OED を用いた Israel (1996) の調査よりも多くの用例に基づいていることがわかる。

Table 1 [VERB + *their way* + DIRECTIONAL PHRASE] の構造をとる表現のトークンおよびタイプ頻度 (Ishizaki (2013: 57))

Period	No. of occurrences (occurrences in OED <i>Online</i> )	No. of works (works in OED <i>Online</i> )
1670–1679	58 (0)	43 (0)
1680–1689	115 (0)	76 (0)
1690–1699	107 (5)	76 (5)
Total	280 (5)	195 (5)

1670 年から 1699 年までの way 構文の用例における動詞と前置詞のトークンおよびタイプ頻度の分布は、Table 2 に示されている (( ) 内の数字は、それぞれのタイプにおけるトークン頻度を表している)。

Table 2 からわかるように、動詞については make と force、前置詞については through と (in-, on-)to のトークン頻度がきわめて高く、これら 4 つの要素を組み合わせただけでも、用例全体の 60% 以上を占める。さらに、Ishizaki (2013) は、way 構文が徐々に用いられ始めた 16–17 世紀におけるこれら 4 要素の分布も調査しており、この構文が用いられ始めた初期の段階では、動詞では make が、前置詞句としては through または (in-, on-) to との組み合わせ

Table 2 17 世紀末における動詞と方向を表す表現の分布 (Ishizaki (2013: 59))

	VERB + <i>their way</i> + DIRECTIONAL PHRASE	
	Verb	Directional phrase
1670-1679	<i>make</i> (31), <i>force</i> (12), <i>break</i> (3), <i>find</i> (2), <i>fight</i> (4), <i>confirm</i> (1), <i>facilitate</i> (1), <i>cut</i> (2), <i>eat</i> (1), <i>strew</i> (1)	<i>through</i> (26), ( <i>in-, on-</i> ) <i>to</i> (26), <i>out</i> ( <i>of</i> NP) (3), <i>home</i> (1), <i>toward(s)</i> (1), <i>back</i> (1), <i>over</i> (1)
1680-1689	<i>make</i> (55), <i>force</i> (30), <i>find</i> (9), <i>fight</i> (7), <i>break</i> (3), <i>cut</i> (2), <i>clear</i> (2), <i>open</i> (2), <i>beat</i> (1), <i>dig</i> (1), <i>eat</i> (1), <i>scratch</i> (1), <i>tear</i> (1)	<i>through</i> (49), ( <i>in-, on-</i> ) <i>to</i> (49), <i>out</i> ( <i>of</i> NP) (5), <i>back</i> (1), <i>down(wards)</i> (1), <i>from</i> (1), <i>further</i> (1), <i>home</i> (1), <i>toward(s)</i> (3), <i>over</i> (4), <i>underground</i> (1), <i>for</i> (1)
1690-1699	<i>make</i> (54), <i>force</i> (27), <i>find</i> (4), <i>cut</i> (3), <i>eat</i> (3), <i>fight</i> (3), <i>break</i> (2), <i>clear</i> (2), <i>dig</i> (2), <i>prepare</i> (2), <i>enforce</i> (1), <i>mistake</i> (1), <i>steal</i> (1), <i>tear</i> (1), <i>work</i> (1)	<i>through</i> (49), ( <i>in-, on-</i> ) <i>to</i> (41), <i>out</i> ( <i>of</i> NP) (10), <i>thither</i> (3) <i>from</i> (2) <i>up</i> (1), <i>down(wards)</i> (2), <i>over</i> (1)

せが優勢であり、動詞については、少し時代を経て、*force* の使用も増えてきたという結果を得ている。この事実に基づき、Ishizaki (2013) では、*way* 構文は、17 世紀末頃までには、「障害（物）を除去または回避するための道の創造（ROAD BUILDING TO CLEAR/AVOID SOME OBSTACLE）」というプロトタイプ的な構文的スキーマから、「力の行使による障害物の除去または回避を目的とした移動（MOVEMENT BY FORCE TO CLEAR/AVOID SOME OBSTACLE）」へ構文スキーマの拡張がみられた、という主張がなされている。この構文変化は、Figure 1 で示された通時的变化のモデルに基づき、Figure 2 のように示されている。

本稿では、Ishizaki (2013) の考察をさらに発展させ、次節では、後期近代英語期以降のアメリカ英語における *way* 構文の発達にみられるスキーマの拡張状況をみていく。

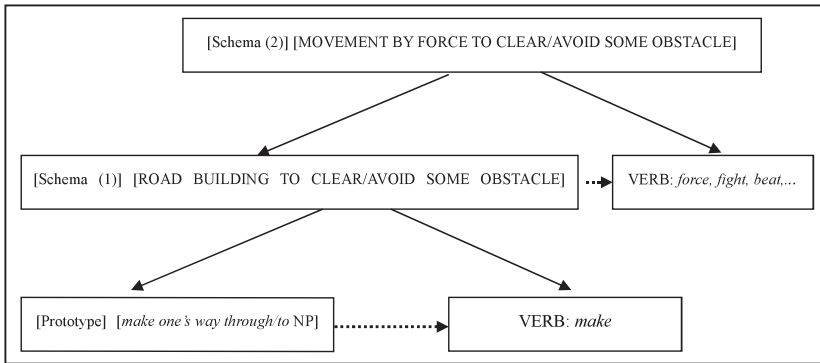


Figure 2 17 世紀末頃までの way 構文における構文スキーマの拡張  
(Ishizaki (2013: 66))

### 3. 後期近代英語期（以降）における way 構文の発達

#### 3.1. イギリス英語における発達

本稿の目的であるアメリカ英語における way 構文の発達過程をみる前に、本節では、まず、同時期のイギリス英語における同構文の発達を概観する。後期近代イギリス英語における way 構文の使用の実態を調査するため、本稿では The Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE) を調査した。その結果の詳細は、Table 3 と Table 4 に示されている。なお、Table 3 の数字はトークン頻度を、( ) 内の数字はタイプ頻度を、それぞれ表している。一方、Table 4 の ( ) 内の数字はそのタイプに対するトークン頻度を表している。いくつかの用例を (8) から (10) に示す。

- (8) When I saw the Jura in September their highest peaks 4,500 English ft. were entirely free of snow. But on the high Alps snow is met with much lower, glaciers at three thousand feet, because **they** are continually supplied with fresh ice and snow from the superior heights, and **force their way into the low valleys by their own weight,**

Table 3 後期近代イギリス英語における way 構文の用例の分布 (PPCMBE)

Period	VERB + <i>one's way</i> + DIRECTIONAL PHRASE	Word count
1700–1769	3 (3)	298,764
1770–1839	17 (5)	368,804
1840–1914	8 (4)	281,327
Total Token (VERB type)	28 (8)	948,895

Table 4 生起する動詞と方向を表す副詞句 (DIRECTIONAL PHRASE) に対するトークンおよびタイプ頻度の分布 (PPCMBE)

	VERB	DIRECTIONAL PHRASE
1700–1769	call (1), force (1), make (1)	(in-) to (3), through (1)
1770–1839	force (9), make (4), find (2), wear (1), work (1)	(in-) to (8), up (4), through (3), abroad (1), back (1), down (1), over (1)
1840–1914	cut (3), force (2), work (2), win (1)	through, (2), (in-) to (2), out (2), home (1), up (1)
Total	28 (8)	31 (8)

- being of too considerable a mass to be rapidly melted.** Thus among the Alps you never see a mountain slightly capped with snow.
- (1835, *The diaries of John Ruskin*, 1, 8. 204–6)
- (9) (Pereg.) **He** had lost his parents, he said; and, destitute of friends, money, and food, **was making his way to the next port**, to offer himself to any vessel that would take him on board, that **he might work his way abroad, and seek a livelihood.**
- (1805, *John Bull; or, the Englishman's fireside*, 38. 644–50)
- (10) There's another, a near relative- he is rich, and prosperous; I am poor and struggling- has blundered into position, through mere luck, while **I have to cut my way through the world with the double-edged sword of cunning and invention.**
- (1861, *Playing with Fire. An Original Comedy*, 22. 801–4)

Tables 3 と Table 4 をみるかぎり、当時のイギリス英語において、way 構文のトークンおよびタイプ頻度はそれほど高くなく、一見したところ、この構文が当時の用法としては定着していなかったような印象を受ける。しかしながら、way 構文は当時のイギリス社会にすでに根ざしており、したがって当時の母語話者の脳内でこの構文が定着（entrenchment）していたことを示唆するいくつかの事実がある。第 1 に、way 構文がさまざまなテキストタイプで用いられていたという点を挙げることができる。一般に言語変化は、まず口語ないしは口語に近い文体で書かれた日記などに現れ、その後保守的とされる文語体の書物の中にも現れるようになる。Table 5 は、PPCMBE で検出された用例のテキストタイプごとの分布を示したものであり、用例数は少ないものの、日記や私的な手紙といった口語的色彩の強いテキストタイプから、歴史書のような文語的色彩の強いテキストにいたるまで、幅広く使われていたことがわかる。

Table 5 PPCMBE から採取された用例のテキストタイプごとの分布

	1700-1769	1770-1839	1840-1914
TRAVELOGUE	1	3	1
DRAMA-COMEDY	0	2	1
SERMON	1	0	0
BIBLIOGROAGY_AUTOGRAPHY	1	0	0
FICTION	0	3	0
HISTORY	0	1	5
LETTERS_PRIVATE	0	1	0
DIARY	0	2	0
PROCEEDINGS_TRIAL	0	5	0
HANDBOOK_OTHERS	0	0	1
Total	3	17	8

第2に、当時の母語話者によって way 構文が注意深く選ばれていたことを示唆する用例もある。(11)は、1816年にロンドンの Spa Field で実際に発生した暴動の首謀者に対する裁判でのやり取りの一部である（強調は筆者による）。

(11) [At Court of King's Bench, Westminster. Monday, June 9]

Q. Do you remember a meeting in Spa Fields, on the 15th of November last?

A. I do.

(中略)

Q. Did Mr. Hunt address the people there?

A. Mr. Hunt addressed the people there; but he addressed them in the field from a Coach before he came in.

Q. Did he afterwards come in?

**A. Afterwards he came into the house, and forced his way up stairs.**

**Q. What do you mean by forced his way up stairs?**

**A. I endeavored to stop him, by speaking to him, and told him it would not be agreeable to me to suffer him to go up stairs, he said, it was of no consequence, he should go up.**

Q. What further was done by you, or by them?

A. He went up stairs, and one of the blinds was cut, and the beading taken from the side of the window, and the window taken out.

Q. By the persons who were there?

A. Yes.

(1817, *The trial of James Watson for High Treason at the Bar of the Court of King's Bench*, 1, 115.939–117. 986/PPCMBE)

(11) は陪審員の一人である Richardson 氏が暴動の目撃証人である John Monkhouse に尋問しているシーンである。その中で、Monkhouse 氏が発した “Afterwards he came into the house, and forced his way up stairs.” という発言に対して、Richardson 氏が “force his way up stairs” とはどのような意味なのかを

確認している。ここで出てくる“he”とは、この暴動の首謀者として裁判にかけられている Henry Hunt 氏を指している。陪審員の Richardson 氏と証人の Monkhouse 氏の本来の職業は、それぞれ、宝くじ売り場のスタッフと Spa Field のオーナーであり、ともに一般の市民である。Spa Field の暴動は当時としては非常に大きな事件であり、その注目度の高い裁判の中で、Hunt 氏が階段を上がる際の移動がいかに強引であったのかを正確に示すために、force one's way up stairs という表現を用いていることがわかる。

最後に、way 構文は当時発行された子ども向けの作品にも効果的に使われている。Lewis Carroll (1832-98) は *Alice's Adventure in Wonderland* の中で (12) の例を含めてこの構文を 5 回用いており、このことは、この構文が当時の子どもにとっても自然に受け入れ可能な表現であったことを強く示唆している。

- (12) ‘The first thing I’ve got to do, said Alice to herself, as she wandered about in the wood, ‘is to grow to my right size again; and the second thing is **to find my way into that lovely garden.** I think that will be the best plan.’

(1865, *Alice's Adventure in Wonderland*: 37)

以上の事実から、PPCMBE による調査では多くの用例を得ることはできなかったものの、これはコーパスサイズが小さいことによる要因が大きいものと考えられ、way 構文という表現形式は、後期近代イギリス英語を母語とする話者の脳内に、世代にかかわらず、構文（すなわち慣習的な意味と形式のペア）として、十分に定着していたものと考えられる。

### 3.2. アメリカ英語における発達

本節では、小説を中心に採取された約 4 億語のアメリカ英語からなるデータベースである COHA を用いた調査の基づき、19 世紀以降のアメリカ英語

における動詞と DIRECTIONAL PHRASE の使用状況の変化をみる<sup>5)</sup>。なお、調査に際しては、(13) に示される検索式を用い、それぞれの結果は、Table 6 と 7 に示されている<sup>6)</sup>。

(13) [[V \*] + {my way, your way, his way, her way, its way, our way, their way} + [i \*]]

Table 6 [VERB+ONE'S *way*+DIRECTIONAL PHRASE] 構造に生起する動詞の分布 (5 例以上生起した動詞のみを表示してある。)

Period	動詞のタイプ (トークン)	トークン総数 ( ( ) 内はタイプ数)
1810-1849 ( I )	make (383), find (345), force (89), pursue (69), cut (52), wind (48), grope (41), wend (40), work (38), win (33), fight (31), thread (20), wing (20), retrace (19), push (17), elbow (14), pick (13), break (12), feel (11), plow (plough) (11), bend (9), tear (7), cleave (5), continue (5), eat (5), explore (5), hew (5), urge (5)	1,445 (85)
1850-1889 ( II )	make (898), find (626), force (163), work (135), grope (98), wend (77), fight (76), pick (71), push (66), feel (64), win (52), cut (51), pursue (48), thread (48), wind (34), elbow (29), wing (20), tear (16), pay (12), eat (10), plow (plough) (10), break (8), continue (8), hew (7), press (7), clear (6), cleave (5), gnaw (5), inquire(en-) (5), retrace (5), tread (5), urge (5), worm (5)	2,803 (114)

5) COHA の詳細については、同ウェブサイト (<http://corpus.byu.edu/coha/>) を参照のこと。

6) [V \*] と [i \*] はそれぞれ、この位置に現れるすべての動詞と前置詞を採集するためのワイルドカードである。



Period	動詞のタイプ (トークン)	トークン総数 ( ( ) 内はタイプ数)
1890-1929 (Ⅲ)	make (1310), find (642), work (225), force (204), fight (178), push (174), pick (123), feel (118), grope (111), thread (81), win (63), wend (53), cut (51), elbow (41), worm (39), wind (35), wing (28), eat (26), tear (23), plow (plough) (22), pay (21), pursue (18), shoulder (18), break (16), edge (16), inquire(en-) (16), burn (11), press (11), earn (10), buy (9), hew (9), retrace (9), tiptoe (8), beat (7), bear (6), nose (6), wedge (6), burst (5), claw (5), continue (5), dig (5), hack (5), resume (5), shoot (5), shove (5), steer (5), talk (5)	4,038 (200)
1930-1969 (Ⅳ)	make (945), find (468), work (346), push (192), fight (192), pick (154), force (126), feel (99), thread (94), grope (63), wind (50), worm (44), talk (34), pay (31), buy (30), elbow (28), shoulder (28), cut (26), inch (24), wend (22), eat (20), claw (19), edge (19), shoot (19), win (18), shove (16), beat (16), wing (16), weave (15), plow (plough) (13), battle (11), hack (11), burn (10), dig (10), earn (9), pursue (9), thrust (9), break (8), lie (8), tear (8), bribe (7), fumble (7), punch (7), thumb (7), burrow (6), light (6), nose (6), retrace (6), wedge (6), ask (5), blast (5), bluff (5), bully (5), press (5), smash (5), stumble (5), tap (5)	3,686 (281)
1970-2009 (Ⅴ)	make (1661), find (616), work (577), pick (249), push (197), fight (175), thread (108), wind (106), force (95), feel (75), talk (58), wend (55), worm (51), inch (50), grope (40), eat (36), shoulder (35), buy (34), weave (31), shove (29), elbow (27), cut (21), pay (21), wave (21), claw (19), edge (19), bully (15),	5,283 (418)

Period	動詞のタイプ（トークン）	トークン総数 （（ ）内はタイプ数）
	battle (13), hack (13), snake (13), navigate (12), wing (11), burn (10), dance (10), dig (10), ease (10), fumble (10), sleep(-walk) (10), beat (9), bluff (9), negotiate (9), plow (plough) (9), punch (9), shoot (9), earn (8), lie (8), slog (8), tear (8), click (7), puff (7), squirm (7), twist (7), blast (6), carve (6), kick (6), muscle (6), stumble (6), trace (6), burrow (5), chew (5), maneuver (5), pull (5), smile (5), sneak (5), spend (5), squeeze (5), thrash (5), thrust (5)	

Table 7 「VERB+ONE'S *way*+DIRECTIONAL PHRASE」構造に生起する前置詞の分布（すべての前置詞を表示してある。）

Period	Types of Verb (token)	Number of occurrences (Token (type))
1810-1849 ( I )	(in-, on-) to (718), through (351), toward(s) (60), along (46), up (44), from (42), among (29), over (29), out (of) (27), across (25), by (24), down (21), for (8), between (7), under (3), about (2), (a)round (2), beneath (2), above (1), after (1), amid (1), past (1), throughout (1)	1,445 (23)
1850-1889 ( II )	(in-, on-) to (1431), through (636), toward(s) (96), up (94), along (88), out (of) (73), from (57), across (54), over (54), down (52), by (43), among (41), between (15), (a)round (13), under (10), past (9), amid (8), for (6), about (6), beneath (5), after (4), beyond (3), above (2), behind (1), before (1), till (1)	2,803 (26)

Period	Types of Verb (token)	Number of occurrences (Token (type))
1890-1929 (Ⅲ)	(in-, on-) to (1929), through (928), toward(s) (158), up (152), along (131), across (126), out (of) (117), down (102), among (85), from (73), over (67), by (48), between (34), past (21), (a)round (20), about (11), for (9), under (8), amid (6), above (2), behind (2), beneath (2), throughout (2), after (1), ahead (1), before (1), beside (1), beyond (1),	4,038 (28)
1930-1969 (Ⅳ)	(in-, on-) to (1433), through (1035), out (of) (194), toward(s) (157), up (152), across (140), down (117), along (100), from (63), (a)round (61), over (57), past (41), among (38), between (29), by (25), about (10), under (10), for (8), behind (4), after (3), beneath (2), aboard (1), above (1), head (1), before (1), beside (1), near (1), throughout (1)	3,686 (28)
1970-2009 (Ⅴ)	(in-, on-) to (2016), through (1413), out (of) (282), toward(s) (246), up (220), down (207), across (195), (a)round (154), along (131), past (113), from (106), over (50), between (46), among (40), by (20), under (12), beneath (6), for (5), about (4), behind (4), beyond (3), above (2), via (2), aboard (1), ahead (1), amid (1), beside (1), near (1), throughout (1)	5,283 (29)

#### 4. 考察

PPCMBE と COHA はコーパスサイズ（約 10 万語 vs. 約 4 億語）や含まれているテキストタイプ（18 の異なるジャンル vs. 主に小説）などの違いから、単純に生起数だけで比較することはできない。しかしながら、動詞に関して、

Table 4 と Table 6, 7 (時期としては (I)-(III) 期におおむね該当) との比較から明らかなことは、アメリカ英語において way 構文が動詞においても前置詞においても非常に生産的な表現となっているということである。それぞれの違いを詳細にみてみると、いくつかの特徴が観察される。まず、アメリカ英語では、force よりも find や work の使用頻度が高くなっているものの、主要な動詞のタイプはイギリス英語のそれとほぼ同じである。他方、Traugott and Trousdale (2013) でも指摘があるように、同時期のイギリス英語にも用例としては観察されるものの、アメリカ英語では、(14) に示されているように、grope, feel, pick, wend, wind, thread などといった「直進的ではない移動を表す動詞」や、(15) に例示されるように、elbow, nose, shoulder, plough, wedge などといった「身体部位や道具を表す動詞」が頻繁に用いられるようになっている。

- (14) a. Instead of his ascending where she had come down, as she had expected, **she heard him grope his way toward the door** she had seen in the wall. There he seemed to find a stairway, and when his steps were thus turned from her, she was seized by a sudden impulse and followed him, **groping her way as she could**.

(1869, Higginson, Thomas Wentworth, *Malbone: an Oldport Romance*/COHA)

- b. Mrs. Nancy Tarbell stood for a moment irresolute, **and then she slowly wended her way along the sidewalk, pondering the thing she had seen**.

(1894, Fuller, Anna, *Peak and Prairie From a Colorado Sketch-book*)

- c. In the few minutes since the beam had been snagged in the trees the water had risen. He could feel the treetrunks swaying in the current. **He inched his way along to the edge of his precarious refuge, never taking his eyes from the shack**. His fingers fumbled numbly as he wrenched off one shoe; he had lost the other without knowing it.

(1943, Marcia Davenport, *Valley of Decision*/COHA)

- (15) a. One of the parties, however, when critically examined, did not seem, strictly speaking, to come under the species. **He was a short, thick-set man, with**

**coarse, commonplace features, and that swaggering air of pretension which marks a low man who is trying to elbow his way upward in the world.**

(1852, Stowe, Harriet Beecher, *Uncle Tom's Cabin*)

- b. The next thing was to arrange to oppose Mascola's next move. "Whatever he does, he's got to do mighty quick," observed Dickie **as the Richard nosed her way among the albacore fishermen.** "It's roughing up in the last five minutes and the glass is falling all the time." "There's only one thing he can do, as near as I can figure," Gregory answered."

(1921, Norton, Brayton, *El Diablo*/COHA)

現代アメリカ英語 (Table 6 の (IV) 期から (V) 期) における動詞タイプの変化で興味深いことは、weave と inch の COHA における初出がそれぞれ 1910 年代と 1920 年代と比較的遅いものの、それ以後は急速に使用頻度が高まっているという事実である。例えば、inch と weave は (I-III) 期ではそれぞれ 1 例と 2 例のみであったが、(IV-V) 期になるとそれぞれ 74 例と 44 例になっている。

以上の動詞タイプに加えて、それほど頻度が高いわけではないものの、(16) に例示されるような, bluff, bribe, maneuver, puff などのような、「他者をだます行為を表す動詞」が顕著な意味的タイプとしてこの構文で用いられるようになった。

- (16) a. Now 34. he proposes to strike out for himself as Kenneth Collins, Inc. Graduated by the University of Washington in 1919, he declined a Rhodes scholarship, taught freshman composition at the University of Idaho for a year, then almost entered the Episcopal ministry. Instead he took an M. A. degree at Harvard. **There is no truth to the story that he bluffed his way into his Macy job without advertising experience.**

(1932, *Time Magazine*: 1932/11/14/COHA)

- b. **He may have bribed his way out of jail,** or have broken out, and we'll have to

let that go until later. He may really be trying to drive back the Yaquis, for fear they'll steal things that he has an eye to himself. Or he may be lying — I think most likely the last.

(1922, Baker, Willard F, *The Boy Ranchers Among the Indians or, Trailing the Yaquis*/COHA)

これまでみてきた動詞タイプは、例えば force や fight のように、動詞のみで「何らかの障害物の存在と力の行使による除去」の意味を読み取ることができるわけではなく、障害物の存在や移動の際に直面する何らかの困難さを、直接ではなく間接的に示す動詞である。このような動詞タイプの使用の増加は、「力によって障害物や困難さを避ける移動」から、「力の行使」が移動の際の 1 つの「手段」として認識されるようになり、「力の行使」以外の手段によって状況を打開あるいは回避するといったように、移動形態が時代を経て多様化していったことを示唆している。

この way 構文における移動形態の多様化は、方向を表す前置詞句の選択とも連動している。方向を表す前置詞（句）の種類については、Table 4 と Table 7 を比較するかぎり、地域や時代による顕著な違いは観察されないようにみえる。しかしながら、方向を表す前置詞句のうち、(14, 15) にあるように、along や around, toward(s) などといった、ある特定の到達点を含意しない前置詞の使用頻度が、やや高くなっている。これは、「力によって障害物や困難さを避ける移動」においては、through や (in-, on-) to といった前置詞に代表されるように、具体的な障害物の存在とその除去・回避の両方を明示する DIRECTIONAL PHRASE によって明示されることが多かったものの<sup>7)</sup>、「直進的ではない移動を表す動詞」や「身体部位や道具を表す動詞」、「他者をだます行為を表す動詞」を表す動詞タイプが用いられる場合には、そのような障害物の存在および除去・回避が、いわばこの構文が用いられる際の

7) Stefanowitsch and Gries (2005: 21) は、障害物の存在を明示する DIRECTIONAL PHRASE を OBSTACLE prepositions とよんでいる。

「前提」として構文スキーマの中に含まれるようになっており、むしろどのような手段でそれを回避したのか、ということに焦点がシフトしたものと考えられる。

このような構文的变化がみられるとはいえ、これまでみてきた「直進的ではない移動を表す動詞」、「身体部位や道具を表す動詞」、「他者をだます行為を表す動詞」といった動詞タイプにおいても、force や fight の場合と同様、その動詞の意味から、何らかの障害（物）の存在や移動の困難さを想定することが可能である。しかしながら、トークン頻度が低いために Table 6 では挙げられていないものの、(17) の yawn one's way のように、「特異なタイプの移動（PECULIAR TYPE OF MOVEMENT）」と名づけることができるようなタイプの用例が散見されるようになる。

- (17) Prairie — the Minniemashie House. It was a tall lean shabby structure, three stories of yellow-streaked wood, the corners covered with sanded pine slabs purporting to symbolize stone. In the hotel office she could see a stretch of bare unclean floor, a line of rickety chairs with brass cuspidors between, a writing-desk with advertisements in mother-of-pearl letters upon the glass-covered back. The dining-room beyond was a jungle of stained table-cloths and catsup bottles. She looked no more at the Minniemashie House. **A man in cuffless shirt-sleeves with pink arm-garters, wearing a linen collar but no tie, yawned his way from Dyer's Drug Store across to the hotel.** He leaned against the wall, scratched a while, sighed, and in a bored way gossiped with a man tilted back in a chair.

(1920, Lewis, Sinclair, *Main Street*/COHA)

(17) において、移動主体である“he”が何らかの障害物を排除または避けることを意図した移動とも、移動する際に何らかの困難さが伴うとも解釈することが難しい。しかしながら、このような事例は、way 構文全体の使用の実態からすると例外的なそれであると考えられる。次の用例を考えてみよう。

(18) a. He laughed his way into the room. (= (1d))

(Gisborne and Patten (2011: 94))

b. % Convulsed with laughter, she giggled her way up the stairs.

(Israel (1996: 218))

(18) は Israel が OED から採取し「移動に付随する活動 (incidental activity)」と名づけたタイプの移動に分類できるものである (%は、多くの話者がこの文を周辺的なものと判断していることを表している)。これらの用例においては、確かに、動詞のみ、あるいは動詞と前置詞句との結合関係から、移動に際して何らかの障害 (物) の存在や移動の際の困難さを想定することが難しい。しかしながら、そのような用例であっても、それが使用される前後の文脈から、何らかの障害 (物) や移動の困難さを想定することが容易なものが多い。例えば、(19) では、一見したところ、困難さとは無縁と思われる *smile one's way into one's favour* という表現が用いられている。しかしながら、その前後の文脈から、その男の笑顔の背後に生きていく上での困難さが伴っていることが明白である。

(19) A man who always smiles is a treacherous-natured, contemptible coward. He knows, himself, how villainous and contemptible he is, **and he feels that you know it too, and so tries to smile his way into your favour.** Turn away from the man who smiles and smiles, and rubs his hands as if he felt and all men knew, that they were really dirty. You can put more souls of such men as that inside of a single grain of sand than there are dimes in the national debt.

(1874, Miller, Joaquin *Unwritten History: Life amongst the Modocs*/COHA)

現代アメリカ英語において、way 構文は非常に生産的であり、文法化した構文であるとみなすことができる。その際、母語話者の脳内には、way 構文が「力の行使」に限定されない、「何らかの手段を講じての障害物の除去ま



たは回避」を表す構文スキーマを持つ表現として定着している一方、個々の話者によっては、その構文がさらに文法化し、（しばしば聞き手や読者からの注目を引くことを目的とした表現として）「特異なタイプの移動」を容認する者がいても不思議ではない。しかしながら、そのような構文スキーマが現代アメリカ英語を母語とする大半の話者の脳内に定着しているとは考えにくく、その意味で、この構文が現在も拡張の途上であるということを強く示唆している。

以上の考察は、Figure 3 のようにまとめることができる。

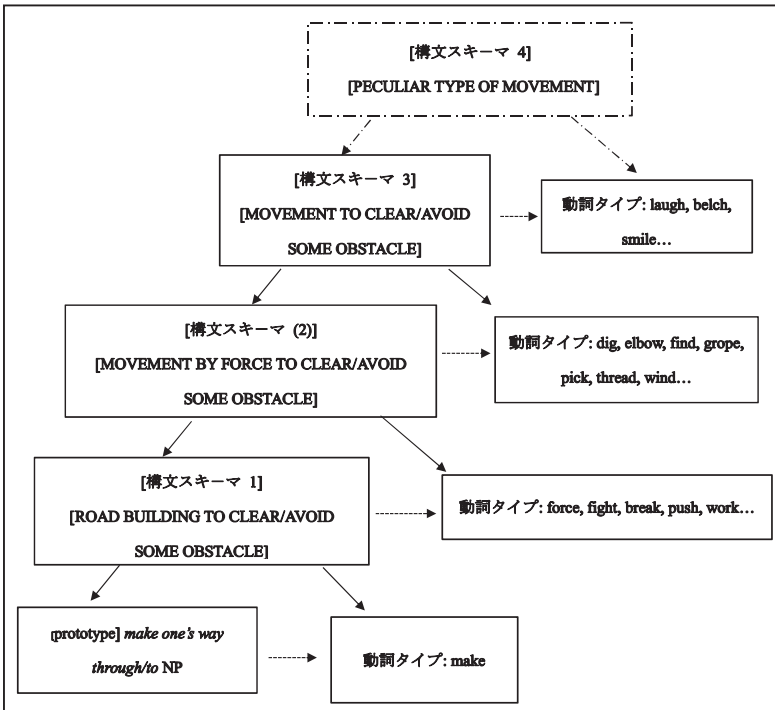


Figure 3 Way 構文の通時的構文変化

## 5. おわりに

本稿では、1810 年以降のアメリカ英語における way 構文の発達を、構文文法 (CG) の観点から考察してきた。後期近代アメリカ英語において、way 構文は、それまでには定着していた「力の行使による、何らかの障害物の除去または避けるための移動 (MOVEMENT BY FORCE TO CLEAR/AVOID SOME OBSTACLE)」という構文スキーマからさらに拡張して、「力の行使」という「手段」に限定されない、さまざまな手段による移動、すなわち「ある種の手段による、何らかの障害物の除去または避けるための移動」「MOVEMENT TO CLEAR/AVOID SOME OBSTACLE」という構文スキーマへと拡張している。さらに、すべての現代アメリカ英語の母語話者によって容認可能となっているわけではないものの、一部の話者には、何らかの障害物の存在や移動に伴う困難さを想起させない、「特異なタイプの移動 (PECULIAR TYPE OF MOVEMENT)」という構文スキーマへの拡張がみられる。しかしながら、Ishizaki (2013) に指摘があるように、この構文の初期の構文スキーマが「障害 (物) を除去または回避するための道の創造 (ROAD BUILDING TO CLEAR/AVOID SOME OBSTACLE)」であったと考えられることから、way 構文が徐々に使われ始めるようになった 17 世紀頃から 400 年経った現代アメリカ英語においても、すべての母語話者の中にそのような意味が完全に漂白しているとはいえない。

## References

- Boas, Hans, C. (2013) “Cognitive Construction Grammar,” In Hoffmann, Thomas and Graeme Trousdale (eds.), *The Oxford Handbook of Construction Grammar*. 233–52. Oxford: Oxford University Press.
- Brinton, Laurel J. and Elizabeth Closs Traugott (2005) *Lexicalization and Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Bybee, Joan (2006) *Frequency of Use and the Organization of Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Carroll, Lewis. (1865) *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Grass*. Oxford and New York: Oxford University Press.
- Gisborne, Nikolas and Amanda Patten (2011) "Construction Grammar and Grammaticalization," In Narrog, Heiko and Bernard Heine (eds.), *The Oxford Handbook of Grammaticalization*. 90–104. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Ishizaki, Yasuaki (2012) "A Usage-Based Analysis of Phrasal Verbs in Early and Late Modern English," *English Language and Linguistics*. 16 (2). 241–260.
- Ishizaki, Yasuaki (2013) "On the Initial Development of the *One's way* Construction: A Construction Grammar Perspective," *IVY*, 46. 49–73.
- Israel Michael (1996) "The *way* Constructions Grow," In Adele Goldberg E. (ed.) *Conceptual Structure, Discourse, and Language*, 217–230. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald, W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*. vol. 1. Sanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2000) "A dynamic usage-based model," In Barlow Michael and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-Based Models of Language*. 1–65. Stanford: CSLI Publications.
- Stefanowitsch, Anatol and Stefan Th. Gries (2005) "Covering Collexemes," *Corpus Linguistics and Linguistic Theory* 1(1). 1–43.
- Traugott, Elizabeth Closs., and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Change*. Oxford: Oxford University Press.

## Corpora

- Corpus of Historical American English (COHA) (<http://corpus.byu.edu/coha/>)
- Early English Books online (EEBO) (<http://eebo.chadwyck.com/home>)
- Oxford English Dictionary (OED) (<http://www.oed.com>)
- Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)  
(<http://www.ling.upenn.edu/histcorpora/PPCMBE-RELEASE-1/>)